

七月二十日午後七時於淺草北清島町統一閣開會
 七月二十一日午後七時於神田橋畔和強樂堂開會
 七月二十二日午後七時於日本橋詰々常磐木俱樂部開會

日蓮主義大講演會

辯士

日宗新報記者 清田 水藤 文歸 堀
 統一記者 山根 義一 東一
 大獅子吼記者 谷上 名 義 君
 布教記者 富田 泰 岳 君
 活宗教記者 安孫子 榮 明 君
 法の響記者 富嶺 隆 君
 妙教記者 水村 道 君
 村雲婦人記者 中山 清 君
 めぐみ記者 外山 清 君
 師子吼記者 松野 日 君

主催

在京 聖祖門下雜誌社

統一

第貳百拾號

天地の聲 妙教記者 水村 遵祥
 日蓮上人の宗教 獅子吼記者 松野 日量
 現代と佛教 大獅子吼記者 吉永 千草
 權威なき國民道徳 村雲婦人記者 中山 法城
 法衣を着けたる文明思想家 日宗新報記者 加藤 文雄
 日蓮主義の一斑 統一記者 井村 日威
 蘇生せしむべき現代 活宗教記者 神代 智明
 御製拜讀の感 文學博士 姊崎 正治
 國民教育及宗教に就て 海軍 大佐 佐藤 鐵太郎
 日蓮主義者の態度 日宗新報記者 清水 歸一
 現代と日蓮 統一記者 山根 日東
 日蓮主義と家庭 めぐみ記者 新甫 寛實
 日蓮主義と文明思潮 法の響記者 石田 顯隆
 八風に就て 布教記者 宮田 泰岳
 聖日蓮の風格 統一記者 三上 義徹
 舶來の提婆と和製の榮特 村雲婦人記者 兒島 宏遠



昭和三十年七月二十四日第三種郵便物認可(毎月一冊)

(東京 三協印刷株式會社印刷)

勅語

朕俄ニ大喪ニ遭ヒ哀痛極リ罔シ但タ皇位一日モ曠クス
ヘカラス國政須臾モ廢スヘカラサルヲ以テ朕ハ茲ニ踐
祚ノ式ヲ行ヘリ
顧フニ先帝睿明ノ資ヲ以テ維新ノ運ニ膺リ萬機ノ政ヲ
親ラシ内治ヲ振刷シ外交ヲ伸張シ大憲ヲ制シ祖訓ヲ
昭ニシ典禮ヲ須テ蒼生ヲ撫ス文教茲ニ敷キ武備爰ニ整
ヒ庶績咸熙リ國威維揚ル其ノ盛德鴻業萬民具ニ仰キ列
邦共ニ視ル寔ニ前古未ダ曾テ有ラサル所ナリ
朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス祖宗ノ
宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レカ行使ヲ愆ルコト無
ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セサラシムルコトヲ期ス有司須ラ
ク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ朕ニ事ヘ臣民亦和衷協同シ
テ忠誠ヲ致スヘシ爾等克ク朕力意ヲ體シ朕力事ヲ獎順
セヨ

今上天皇陛下 御諱嘉仁。寶算三十四に當らせ給ひ。
先帝陛下の遺業宏圖を繼承し踐祚の大典を行はせ給
ふ。陛下。天資英明。純孝至仁。英風絕倫。允文允武。
中外の遍く欽仰し奉る所也
今や。我國威八紘に揚り久遠神明の聖猷を行ふべきの
時。斯の如き英邁聖明の陛下を奉戴す。國民の福祉
何者か焉れに加へむ
願はくは。陛下絶對の劍璽を提げて帝國の體性を開顯
し給はむ。天晴れ地明かに。天日嗣は永世無終に昌へ
て疆りなけむ。誠恐誠惶

明治天皇陛下 英邁達識ノ天資ヲ以テ祖宗ノ偉烈ヲ
繼承シ。内立憲ノ制ヲ勦メ民心ヲ統一シ。外列強ト
交ヲ修メ約ヲ締シ。仁義膺懲ノ典ヲ正シテ北海南溟
ノ地ヲ拓キ。包容進取ノ國是ヲ奠メテ帝國ノ基礎ヲ
泰山ノ安キニ置カシメ給フ。宏圖大業古今ニ卓絶シ。
聖德仁慈十方ニ遍シ。而シテ今ヤ
以ニ方便力故現有滅不滅の御相を示シタマフ。萬
性悲痛泣哭措ク所ヲ知ラズ。吾等 虔而至心ヲ以テ
佛天ノ寶前ニ拜跪シテ知見照覽ヲ熱禱シ奉ル。嗚呼
噫噫

御製拜讀の感

七月二十九日午後八時天晴會夏期講習會の壇上
先帝陛下御危険の警報を手にし無限の痛恨をい
だきて静かに述べられたる所感講演の記也

文學博士 姊崎 正 治

此の會に臨みまして實證主義と理想主義とを述べよ
うと思ひましたが、吾人は目下國民として大切の時
である、私は今の處で其等を述べざる餘裕がない、諸君も
此際實證主義を求むる必要はないと思ふ、私は昨日二
重橋に参りましたが、人の念頭には此の一事あるのみ
で大に憂慮して居ります、我等は心に確信があるから
して少しも倉卒^{あはて}では居らぬ、聖上陛下のお仁徳は今
更申し上るも畏れ多い事で御座いますが、御玉體の御
惱まざる、今日最も深く心に思ひ起すのは、御製の

目に見えぬ神の心にかよふなる

人の心はまことなりけれ

と云ふ一首であります、此の一首は陛下の御一生を通
じての大教訓で御座います、今日我々六千萬の同胞は

趣きがある、然し宮中よりの通り道に宮城前に祈つて

おる状態を見ると多少の遺憾がある、多くの人々は思
ひ／＼にやつておる、吾々の社會生活の上からはあら
ゆる種々のものが必要である、形式から宗教が各々割
據する、その中には誠の心はあるが偏狹である、形も
思ひ／＼にかはつておる、之れは昔にすると、聖徳太
子の御世、延暦の御世、及び日蓮上人の圓浮統一の大
理想があつたにもかゝらず、今迄の社會は不幸にも
之れを沮害して來た、今日迄は文明は發達しては來た

が、人心の改善はまだ／＼中々である、誠の心は一であ
るが之れを表はすに區々である、誠を發揮することは
よいが今日の儘では實に支離滅裂極つておる、之れ國
家の統一の上に害を及ぼしはせんか、此等の問題につ
いては論究する所が多々ある、一外國人がこう云ふ事
を云ふて居る、日本人は皇室崇拜の宗教を作つておる
と、今その外人を連れて來て二重橋の今日の光景を拜
さしめたならば實に驚き入るであらう、然し之等宗教
心が物質文明科學萬能主義のために妨害されて居るの

御玉體の御惱の御全快を熱心に祈て居りますが、昨今

二重橋外に集つて祈るものは非常に數多ある、之れ皆

自己の一念からして誠を表はすものである、殊に大切

なのは此の天神感應の誠の一念である、此の誠が有る

ならば人生萬事何事か成らざる事があらうか、現今

は此の誠が天から試験されておるのである、此の誠が

我々の心の宗教心道德心の根本である、凡ての道德宗

教は此の誠に歸するのである、此の御製は、陛下の御

一生及び未來萬々歳の後でも、陛下の御威徳と共に輝

き渡るべきものである、之れにつき聊か所感を述べよ

うと思ふ、維新後教育家と云はず政治家と云はず宗教

を輕視したために、宗教心は甚しく衰ひた、日清日露

の戦時に多少其の芽とも云ふべきものが萌された、然

し此の時は時間が長いし多少遠距離にあつたために、

御製の「目に見えぬ云々」の「まことの心」は發揮さ

れたが未だ十分ではなかつた、今回の御不例は皇室並

に吾々國民にとつては不幸であるが、支那印度日本の

古聖が云ひ傳ひ身に行つた宗教心が明かに生き返つた

は遺憾に堪えぬ、吾人は誠の心を一に歸し、即ち人心の

統一結合を圖り以て精神界の一大勢力を作るべきであ

る、吾人は此の意味に於て、聖上陛下の御惱御平愈寶

祚萬歳を諸天善神に祈るべきであると思ふ、私は昨日

今日以來特に此の感にうたれましたので唯ほんの所感

を述べたに過ぎない、此の境を下るに先きだつて諸君

の御記憶を新にするため御製をもう一度繰り返すこと

と致しませう。

目に見えぬ神の心にかよふなる

人の心はまことなりけれ

聖日蓮云く

汝早改信仰寸心速歸實乘一善

然即三界佛界也佛國夫哀哉

國民教育及宗教に就て

海軍大佐 佐藤 鐵 太郎

去りながら世の教育家も従來の思想の偏狹なるを悟り、國民道德と一致する限り宗教家と相輔けて御奉公せなければならぬと云ふ點に留意するに至つたのは確かに一進歩であります、之が爲には、是非とも宗教の現狀を調査するの必要があります、各宗の教義を研究するの義務があります、而して國民道德と一致する宗教を尋ねて之を發見し、然る後之を相佐け相携へて天壤無窮の御國體を護らなければならぬのであります、若しも萬一右の如き完全なる宗教がないと言はるゝならば、未熟ながら私の所信を御答しようではありませんか、私は疑もなく日蓮上人に依つて立てられたる宗教は、十分に望み通りの資格を備へて居ると信ずるのであります。

之迄申上げましたのは、固より之から申上げる事も諸君の御承知のことと少しも耳新しい點がなからうと上は、どうしても權威ある信條を與へられてあらなければならぬのであります、私は今假りに之を靈育と命ずるのであります、此の靈育なるものは、どうしても人間以上人力以上の實在を信せざれば悟り得られないので、一種の眞率なる意味合を含んで居ると信ずるのであります、この境界になりましては宗教の力を藉りる外はありませぬ、假令理論上では他の方法がないとも限らぬと致しましたも、宗教程この目的に適當なるものはないのであります。

然るに世の教育家の中には、宗教家を疎外し學校教育と宗教とを分離するが如く、社會教育をも宗教の範圍外に置かんとするものがありますが、之は誠に嘆はしき次第で、如此排斥主義の教育家が、終には自分もまた排斥せらるゝを悟らないと見るのであります、何に致せ、現今の教育家は、明らかに現今の宗教家の人格と行爲とを評して墜落せりとなし、一概に之を輕蔑するのであります、之はただしも、この一事を以て宗教を疎外せんとするに至ては誠に沙汰の限りで

思ひます、今暫く御耳を拜借して少しく申上げて見たいと思ふのであります。

世の教育家が理性の發達を以て國民的道德の向上進歩を計り得べきものと信じたる時代は、既往に葬られて仕舞ふたのであります、夫と同時に情操の働きを重視するの傾向を生じ、從て感情に訴へて德育の進歩を計らんとするの意向を生じたのであります、私は此の方法に如何なる名稱を附すべきか、亦既に如何なる名稱を附せられて居りますかを知らないのであります、之を智育に對して申しますれば、或は情育とか感育とか云ふべきものかも知れませんが、感育や情育位では却々追いつかぬのであります、自分勝手に感情のみでは到底正しいことが出来ません、自然主義とか性慾主義とか云ふのは悉皆之であります、假令一步を譲り理性と融化して居ると申しまして、唯だ、一片の道德ならば、兎に角大なる誘惑を受くるか、或は大なる迫害を受け自己の生命にも關するが如き場合に於て、毅然として正道を履て迷はずと云ふ位になります

あります、若し果してこの筆法を正當なりとせば、教育家の墜落は如何に處分するでありましょうか、其れとも自分等は決して墜落せぬと思ふて居るでありましょうか、或は亦自己の墜落を自覺し、袖を違ねて國民教育の任務を捨てるでありましょうか、果して然らば果して何人が國民を指導して其品格を進むるでありましょうか、之はどうしても一考せなければなりませんので、今日の急務は教育家も自から其品格を陶冶し、宗教家も自から其徳性を進め、相敬し相輔けて進まなければならぬのであります、人に依りましては宗教と教育とは其性質を異にするが故に、相提携して進むことが出来ぬと速断する人もありますが、之にも私は同意を表することが出来ません、私は宗教と教育とは假令へば水雷と大砲の如く、其性質固より同一ではない、其使用の目的も決して同一ではありませぬが、敵艦と云ふ協同の目的に對しては、相提携して進み得るものと信するのであります、然るに若し世の教育家の論する如く、教育と宗教とを分離し、宗教をして國民

教育に預からしめざることを、假定し、宗教をして社會教育より退かしめ、唯だ不幸の時に御經を讀む計りとしたならばどうでありましょうか、若し萬一宗教家自身の好みによりてこう云ふ事になつたならば、或は一時はそれで治まりが付くかも知れませんが、決してそう云ふ譯には参りません、成程風と云ふものは何時でもそよ〜と吹くもので決して塀を倒す様なことがないとしたならば、それは如何にも都合が宜い、また日儲取りの爲には何時でも晴天であつたならば宜しいのでありましようしが、百性の身から見れば雨が降り呉れなければ困るのであります、太陽の目から見たならば草木の繁茂するのは自分の力と見へるでありましようし、雨の方から見たならば雨の力であると考ふるでありましようが、實際は兩方とも適當にやつて呉れなければ美くないので、幾ら教育家が教育萬能と思ふても宗教家は決して之に屈從するものでありませんので、それ相當に相應の働きをするのであります、果して之が事實でありますならば、學校教育と社會教育

を一時的の方便教にあらざれば、宗教の本義を辨へざる邪宗でありますから、若しも國民が宗教に對する趣味を覺へたならば、久からずして改良せられ眞正なる意味合を根本とする完全無缺なるものとなるであらうと思ひまするので、教育家も排斥的態度を改め、我御國體の如く包容的に統一的に精神修養に關係ある色々の事柄を調へ、其主義根本を同ふする宗教を選んで、之と提携し智徳圓滿なる國民を養成せなければならぬと思ふのであります。

人に依りましては、現在の宗教内に混合する悪思想を恐れ、全力を盡して之を排斥せんとする諸大家もあると云ふことであります、若しもそう云ふ宗教があつたならば、之は是非とも監督を要するので、丁度自然主義や性慾主義や不健全なる學說の産物である如く、宗教内の非國家主義や厭離穢土主義が不健全なる佛教の解釋より生ずるのでありますならば、是等の宗教は是非とも改良せなければならぬのであります、唯だ御無事〜を土臺とし劃一を統一とは違

と分離しては國民道德を進むる譯には行かぬと謂ひながら、同じ社會教育中の通俗教育と宗教とを分離させようなど、云ふことは偏見中の偏見とも云ふべきで、之等の考は畢竟教育本位で國學本位でない所から起るのであります、我國の教育が國家本位でなければならぬと同様に、我國の宗教は日蓮上人の仰せの如く國家本位でなければならぬのは無論のことである、宗教は超國家の分子を含むから超國家的のものであると云ふならば、教育それ自身もまた超國家的の分子を含むから超國家的のものであると云はなければならぬので教育が國民的の大本の上に立たなければならぬと同様に宗教もまた國民的基礎の上に立たなければならぬのであります、殊に我御國體が他の國に超越したる意味合を有する以上は、猶更宗教の爲には御國體に融合し易き傾向を有するのであります。

是等の道理から考へて見ますれば、宗教の中にも夫夫其教義がありますので、國民道德と兩立し難さもないではありませんが、之等は畢竟一方に偏したましたならば、どうしても偉大なる人物を養成するところが出来ませんので、譬へば萩は萩桔梗は桔梗と咲き亂れて居るが中にも、一貫したる脈路あり靈妙なる一致あり、自から立派なる統一が行はれて居ると云ふ様な風でなければならぬと思ふのであります、然るに世の學者の一派の人は、宗教と云ふものは宗祖の垂れた教義を絶對的に遵奉すべきもので、何等の變化をも許さぬが如く曲解し、宗教を以て時勢に伴ふて進歩せざるものと速断するのであります、之れなどは大なる謬りで、日蓮上人も仰せられたる如く、教機時國前後を鑒みてこそ宗教は初めて弘通すべきもので、時に適し機に應ずる如く、亦國體に契合する如く人を指導するのが眼目であります、法は必ず國を鑒みて弘むべし彼の國に好かりし法なれば必ず此國に好かるべしと思ふべからず」と云ふのが則ちそれでありませぬ。

之等の道理をも辨へず一概に宗教を排斥し、國民道德を一手に引き受けんとするが如きは、固より取るに足らざる議論でありますので、之等の意義を考へ宗教

教育の兩者相提携し相佐けて國民道德の進歩を圖らなければならぬのであります、元來モーポリと云ふものは意外の所に弊害を生ずるもので、如何に善意に解釋しても事物の進歩に死刑の宣告を與ふるが如きものであると云ふことは争はれぬ次第でありますから、この邊の所に注意するのが必要であります、人に依りましては、教育の改良を圖るのは畢竟教育家の任で宗教家の關する所ではない、從て國民教育は宗教家をして教育家の主張を根本として之に隸從せしめ、何時までも主従の關係を以て進ましめなければならぬと云ふ人もあるのであるが、原來教育と宗教とは水と砂糖の如きもので、假令宗教心が濃厚でも溢れる様なことはないのであります、從て相疎外し相干格するの必要なきは勿論であります。

尙一世の學者教育家に顧度いのは、宗教は個人的のものでない從て國家的のものでもないと云ふ議論も、宗教は超國家的である人類全體を目的とするものであると云ふのも悉く辭論である、宗教は個人に對しては

するが如きは大なる早計であります、少くとも日蓮上人の教義を研究し、而る後に國民教育と宗教とは如何に密接なる關係を有するかを論じて貰ひたいのであるそれから今一つ注意して貰ひたいのは此頃の新聞にも見へます通り、小學校の先生達は無學で文字を知らんこと夥しい、鼠と云ふ字を本統に書くことが出来ぬ位は仕方がない、餘程の學者でも比叡山から鹽辛献上と間違なく書けるものは少ないと云ふことでありますから、之れなどはなんでもないが、努力奮闘を奴ノ力奮ツテ厨と書くなどは論外であります、飽食暖衣を抱食斷衣と書き、煩悶を反問聲譽を生世蕙奧を運應公明正大を光明聲大、會稽山を會計山報復を抱腹と書へたり、高師直を高等師範學校とでも考へたと見へてコウシと讀んだなどは滑稽であります、新聞記者先生なども癡狂をネイモウと讀んだり、進歩をシンヤコクとかシンシヨウと讀んだり致しませるから、決して笑事ではありませぬので、既に私共も自身の無學に驚くことが多いのであります、既に紊亂の字の如きは、此間新

個人に宜しく、國家に對しては國家に宜しく、人類全體に對しては人類に宜しきもので、決して割據的のものでない部分的のものではない、人に依りては、宗教は社會其物と共に存在する以上は社會的性質を帯びて來るのは無論であるが、其根本は個人の絶對信仰にあるから信仰を同ふするものに限りて相團結すべき性質のもので、固より之を以て人に強ゆべきものではないと云ふのであります、之は固より其通りであります、凡ての道德もその通りて國家の權威を以て押しつけるものではありません、亦押しつけられるものでもありませんので、之も矢張り宗教と同様に各人の所信を正當に導くべきもので、宗教のみはこうであると云ふ譯には參らぬのでありますから、世の教育者たるものは決して手前味噌の議論を立てず、今少しく眼光を大にし、今少しく宗教を調べ、如何なる宗派の教義は國民教育と一致しないか、如何なる宗派は一致するかを考へて貰ひたいのであります、私よりも尙一層アナ氣な宗教觀を以て、宗教は國民道德と一致せずと稱

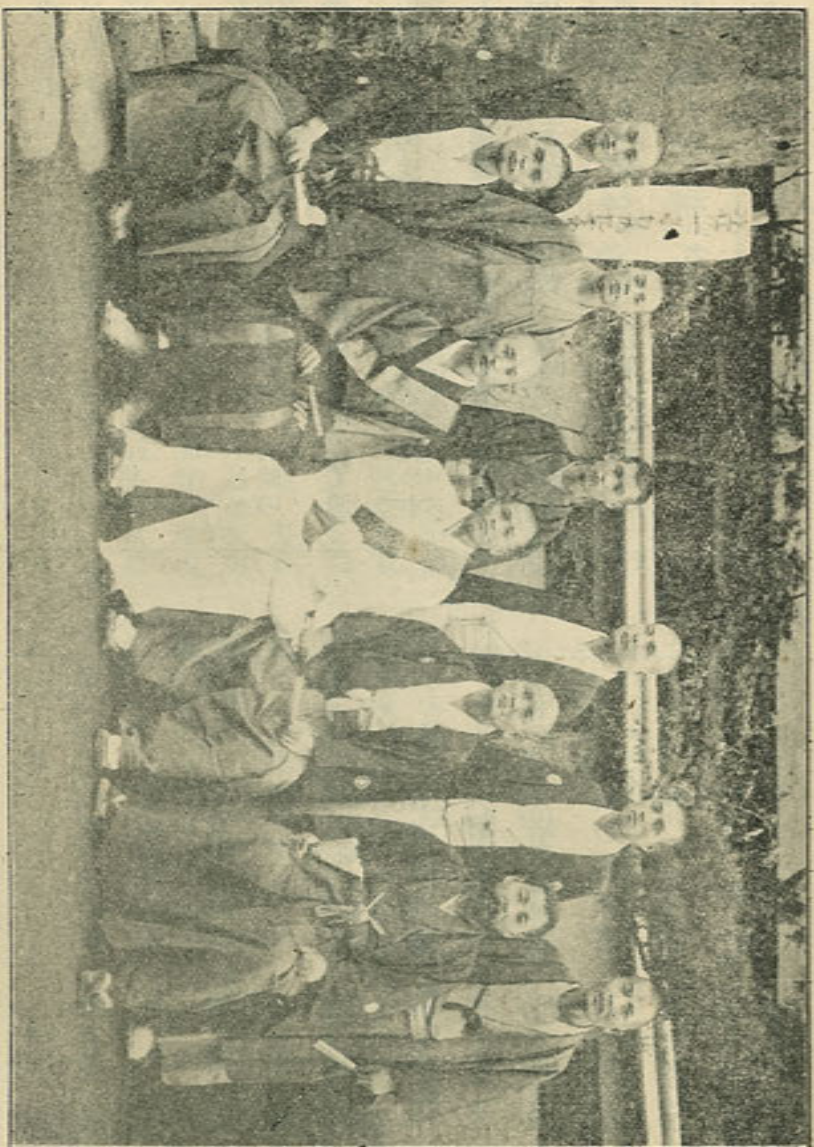
聞を讀む迄は本道の發音はナンランであると云ふことを知らないので、若し人がナンランと讀んだなら田舎讀と思ふて笑ふたかも知れぬのであります、或軍人が其部下に如何なる佳言も善行もと書せたら、如何なる加減も全甲もと書いたと云ふこともありますが、之等は果して謹の罪でありましょうか、讀書算盤を大切にせないで、粘土細工や何かをも同様に重視したる爲ではありますまいか、算盤や讀み書きが優等でも、新粉細工が下手であるから優等生ではないと云ふ様な鹽梅であるから、こう云ふ風になつたのではありませぬでしょうか、之は試験すれば直に分るから宜しう御座ります、德育上にも之と同様の大缺點を生じて居るのではありますまいか、大切な所を疎略にしつゝまらぬことを八釜敷すると云ふことは果してないではありません、うか、教育家は教育萬能主義をふり廻し、動もすれば宗教家を疎外するのであります、御自分自身にも邪宗に劣らぬ惡思想を教へるものがないのであります、うか、少なくとも我國體に適合せざる教育をなすもの

がないのでありましようか、之は能く注意して貰はなければなるまいと思ふのであります、何に致せ現今の教育家の多くは教育本位で、宗教家の多くは宗教本位で、それから又文藝家は主として文藝本位、學者の多くは各其屬する學派本位であると云ふことは争はれぬことでありますから、能く此點に注意し今少し氣分を大にし、御互に協同して協同の目的に進まなければなるまいと思ふのであります。

(本論は天晴會例會講演にして前號所載の續きなれば斯意を諒して精讀を望む) (記者)

大聖日蓮云

又華嚴經深密經般若經大日經等の權大乘の人々。各々劣謂勝見を起して。我宗は或は法華經と齊等。或は勝りたりなんと申す人多く出來し。或は國主等此を用ぬれば此によて三毒八萬四千の病起る。返て自の依經をもつて治すれどもいよ倍増す。設ひ法華經をもつて行ふとも驗しなし。經は勝れてをはしませども行者の僻見の者なるが故也。乃至、今末法に入て本門のひろまらせ給ふべきには。小乘權大乘迹門の人々。設ひ科なくとも彼彼の法にては驗有るべからず。



聖詞に云く

とても此身は徒に山野の土と成べし、惜みても何かせん、惜むとも惜みとぐべからず人久しといへども百年には過ぎず、其間の事は一睡の夢ぞがし、受難さ人身を得て適出家せる者佛法を學し、誘法の者を責めずして徒に遊戯雜談のみして明し暮さん者は法師の皮を着たる畜生也、法師の名を借て世を渡り身を養といへ共、法師と成義は一もなし、法師と云ふ名字をぬすめる盗人也恥べし恐るべし。

雜誌社聯合講演

天地の聲

抄記記者 水 村 遊 祥

三日間都下に於て聖祖門下雜誌記者聯合講演會を開催するに當て、本日第一の籤を抽きしは私である。

世人は宗教と云は、日常實際生活と別存せるが如く思ひ、又宗教を信するもの、中にも、迷信に迷信を重ねたるもの、あるのは、私の久しく遺憾する所である、併し宗教を以て實際生活以外に觀て居るものは、是れ未だ宗教の眞味を知らざる者であつて、一度之を味ふ時は、百姓の持つ鋤の中にも、商人の彈ちく算盤の珠にも、宗教有ることを知るであらう、然るに或る者は之に遠かつて、暗きより暗きに迷ひ入つて淋しき生活を送つて居る、然らば宗教は現代と如何なる關係を有せるやに就ては、先づ人は如何にして生れたるか、人は

めぐみ記者	新甫寛實君
師子吼記者	瀬戸義人君
日宗新報記者	加藤文雄君
統一記者	山根日東君
村雲婦人記者	兒島宏遠君
活宗教記者	神代智明君
大獅子吼記者	板倉泰運君
日宗新報記者	清水歸一君
法の響記者	石田顯隆君
統一記者	井村日威君
統一記者	三上義徹君

何を目的とすべきか、人は死後如何になるべきかの三問題を理解せねばならぬ、が此問題を玩味することは最も難いのであつて、又如何なる高位富者と雖ども、之を解し得ぬものは寂寥たる生涯を送らねばならぬ、けれども我宗教は如何に貧者と雖どもよく之を味ふことが出来る、

當閣へ来る途中でも、身に絹布を纏へる紳士があれ、又其前には垢體破衣の貧者も通る、併し貧富は必ずしも賢愚を以て區別することは出来ない、貧者必ず愚、富者は必ず賢とは極まつては居まい、賢にして貧なる、愚にして富める、其中には何等かの原因がなくてはならぬ、ニュートンが僅かの落果を見て引力説を發見したのを見て、此人生の波の間には必ず何等かの理由がなくてはなるまいと思ふ、此世で望みもしない貧乏をするのは、之を三世に亘つて考へると全く過去の薄徳によるので、一に過去の宿習の大小如何によつて現世の波の大小ありと推理し得る、過去既に然りとすれば、未來も亦現世の行爲如何によつて定ま

るの言ふまでもない、

茲を以て汝惡を去つて須らく善を積むべし然らば樂を得んと、吾人の耳に響く大なる聲がある、妙法蓮華經即ち是れである、妙法とは一言にして之を言はば、法律などの法と同じく善因善果惡因惡果を教へて、細大漏らさず行爲に應報する天地の大法律に外ならない而して其活用は自然にして人爲の如何ともするなき不思議の法なるを以て、之を歎美して妙と稱するのみ、三世諸佛は等しく世々番々之を衆生に傳へ、最も近く吾人に與へられたのが大聖釋尊で、之を教時國に考へて我帝國に宣布されたのが即ち日蓮上人である、

此因縁約束によつて吾人に此妙法を授けられたのであるが、吾人一度考を此に及ぼす時は、如何に宗教の貴きかを知ることが出来やう、頃者人あつて、犬に吠へらるゝ様な人は未だ駄目だと予に語つたが、成程犬に吠へらるゝやうでは其人には未だ隙目があるので、滿身の勇氣を込めて八方隙なき時は犬などに吠へらるゝものではない、近來流行の靜座法では、丹田に力

を入れて呼吸をし、精神を統一して我は天地なり天地は我なりとの觀念を悟了し、以て人に隙目のない様に修養せんとするのであるが、人にして妙法を信唱するやうになれば必ずこの境地に達することは疑ないことである。

斯く日蓮主義は日常生活に必須なものであるから、宗祖は、彼の非現代的な、而して非國家的なる各宗を四大格言を唱道して以て折伏し、此妙法を宣傳せん爲め建長五年四月二十八日、房州の山頭に妙法蓮華經を三唱し始められたのである、是れ即ち大なる聲である、



現代と佛教

大獅子吼記者 吉 永 千 草

我日蓮上人の大曼陀羅は、天照大神を列ねて國家祈禱を現はして居る、然る處、今來會の途に聖上御不例の御事を拜聞致しました、予は滿場の諸氏と共に至誠以て國父陛下御快癒を祈り奉らんと欲するものである、私は自分の社の代表としてこゝに出席したのでありますが、敢て諸氏の教を乞はんが爲めである、私是在來所々の會堂に佛教の講話を參聽したが、何處も寂々寥々たるありさまである、然るに雲右衛門が一圓の入場料を取り、又は演劇に高價の觀劇料を取つても何れも滿員の有様である、これは新聞の三面記事に多くの惡事のみが滿載されて人を喜ばせて居るが如く、かゝる貴き會合には世人が冷淡であることを證して居るのであると思ふ、然るに今晚は斯く滿員の有様であるといふことは、最も慶賀すべき現象であつて、以後も時時聯合講演を所々に開催して怠らなければ、必ずや遠

からずして宗教講演は一圓の參聽料を拂つても、滿員の盛會を來たし、觀劇などは無料でも寂しくなるやうになると信する、さて佛教とは、佛の教であつて貪瞋痴の三毒を滅除せんとするものである、人は淺間しくも此三毒に間斷なく襲はれて居ることを氣付かねばなるまい、私の知人に有名なる横濱の富豪がある、銀行まで設立して居るのだが名は秘して置かう、が大貪欲の人であつて、因果の車の遂に回り來つた好實例がある、それは其娘に婿を迎へて程なく妊娠したが、如何なる事情か井に投じて死んだ、親としては最愛の娘に死なれたのであるから、身も世もあらず歎くが人情である、然るに立派な葬式を營んだはよいが、翌朝菩提寺の和尚が私の家へ飛んで來ての話には、有らうことか有るまい事か、葬式の布施包の上に金五十圓と認めながら中味は十の字が無くなつてたゞの五圓しかないので、和尚も甚なからず迷惑したさうである、諸君之で供養になるであらうか、而して婿も亦九州の名所で自殺した、それでも猶應報の目が醒めない、又或る富

豪は禪宗の有名な宗演和尚を招て世間體を飾つて居るが、宗演師の私への話には、本人は何も解らないで解つたやうな顔をして居て困るとの事である、これは自分が貪婪の罪惡を隠す爲め宗教に托して世間體を誤魔化して居るクセ者であるまいか、反之昔京都の四條の道で、大金を拾つた乞食があつて、近所の呉服屋の店頭に預けて遺失主を探して居たが、主は遂に分つて命に代ゆる大金なりしかば、多大の謝禮をしやうとしたが、乞食は斷じて受けず、「何もなき袂は輕し夕涼みの一句を詠じて漂然として去つて終つた、何と聞くも涼しい美談ではないか、

曠に就ては予曾て所用あつて出勤中の某辯護士を裁判所に訪ひ、其言ふまゝに法廷を覗いて見ると、今や業平も斯くやと思ふ計りの美男子が審問を受けつゝある所で、暫く聞て居ると、一時の腹立ちから大切な伯母を毆打致死せしめたものと分つた、諸君、お互に何かの時、どうかするとムラ／＼と起る彼の心、あれがかゝる重罪を犯すことがある、愚痴は誰しもあること

日蓮上人の宗教

師子吼記者 松野日量

我日蓮上人の宗教は、一言以て之を謂はゞ、生死一大事血脈抄に示されたが如く、弟子旦那一同に南無妙法蓮華經と唱ふる宗教である、而して世人は、佛教は勸善懲惡の教だと云ふが之は第一義ではない、第一義は德行進化といふことにあるので、我宗祖は妙法を以て德行進化せしめやうと唱導せられたのである、然るに、昔は神儒佛の三道を以て國教と定められ、殊に法華經は鎮護國家の法として尊敬せられ、又今日でこそ三教會同に於て佛教も大に尊重されて居るが、明治十九年頃の内務省令には、神儒佛を放擲するにはあらざれども信仰は自由たるべし、佛教は東洋思想の古に於ては文化に多大の効はあつたが、今日西洋文明の輸入せらるゝ世には昨食古曆に過ぎず、宜しく基督教を入れて文化の發展を補くべしとの意味のものが出て居る、此は政府が排斥したのであらうか、否僧侶から之を招いたのであると思ふ、佛教僧侶にして佛教を知ら

であるが、殊に女は慎しむべきことである、

要するに我宗祖の教は、現在の分に安んせよといふにある、併し此儘に甘んじて居れといふのではない、向上活動の有らん限りを盡して、此三毒を起さぬ様に其分に安んせよといふのである、若し幸に然らば世は太平なるを得るであらう、尙三面記事を減ずるには、僧侶が慕守せず堂塔を祭場にせず、連日の説教によつて社會の感化を勉むれば必ず減るに極まつて居る、又昔我國は、神儒佛三教を以て國教と定めて居たのが、今日では儒教が別にせられて神耶佛の三教會同となつた、されば將來又も佛教が排斥される様なことの無いやうに、寧ろ佛教の力のみで事の足りるやうに大に勉めなければならぬと思ふ、

す、葬祭のみを専門として居たが當時の狀態であつた、德行進化の道などを知つて居ない、

兎に角我が宗は我國體を擁護するものである、體とは法華經方便品に如是性は如是相如是體とあつて、何物にも相性を具足して居る、故に我國體にも此三を具して居るから之を發揚せしめねばならぬ、其方法は即ち此五字七字より外にない、而して大凡そ此世の中は戦争であつて、隨所不斷一事一物として戦争にあらざることはない、有形にあらざるは無形の戦をして居る、宗祖が龍口の刑場に赴かせらるゝ途中、八幡宮の祠前に大聲諷曉されたのも戦であると思ふ、無形の戦争は善と惡との争であつて、善の極は佛界惡の極は地獄界即ち相接せる佛界と地獄界とは、一體兩面であつて、所謂凡聖一如生死即涅槃であるけれども、而も其中に差別がある、平等とは差別の極でなければならぬ、故に此差別せる佛と地獄とは時々刻々に戦ふものである、されば吾人は此地獄界を打ち破つて此世界を本佛國土とせねばならない、之を即ち德行進化といふのである。

法衣を着けたる文明思想家

日宗新報記者 加藤 文雄

今晚予は演壇に立つに二つの心苦しいことがある、
 一は 陛下の御重患で在らせらるゝことゝ、二は先考
 亡後今日で五十五日しかならず、愁涙未だ渴かずして
 公衆の前に立つことゝである、併し幸に本佛の加護に
 よつて些かでも自分の考を諸君に傳へることを得ば、
 先考の供養にもなることゝ信ずる、

予の演題の意義は、法衣を着たるものは文明の思想
 を理解すべく、又文明の思想家も法衣を着て貰い度い
 との意である、併し必ずしも此の如き法衣を着よとい
 ふのではない、少くとも法衣を着たやうな心持になつ
 て貰ひたいのである、これには自分の衣を着るに至つ
 た因縁話から始めたい、

私は寺に生れたもので、父は文雅である、坊より爽
 やかな勤行の聲を聞いて目を醒しつゝ育てられた、小
 學に通ふに至つて朋友から寺の子として嘲けられた、

ら、一方にはまた包容の襟度がなければ、日蓮主義の
 信仰ではない、

然るに一面には現實を飛びはなれたやうな理屈を列
 べて、宗教は常識以上なるべきものを常識以外の説に
 陥り、高き理想を逐ひつゝ、足は既に現實の地を離れて
 居る、而して包容の襟度あるが如きものは信仰の節持
 なく、信仰の操守ある如きものは包容の襟度に缺けて
 居る、聖人は嚴烈なる信仰の前には何物も赦さなかつ
 たが、世人は其方面のみを見て居るが、果して其のみ
 であらうか、然らず、其人格を解剖すれば血あり亦涙
 もある、而も情に溺るゝに非らず、其温かき底には理
 性の智水湛々たるものありて、能く救済の道を誤らな
 い、如何なるものも聖人の教に浴したものが伏せざる
 を得ない所以は茲にある、

(21)
 又聖人は靈的國家としての我國を中心として世界
 統一を叫びたが、其教義も亦明かなる然る系統があ
 る、即ち一面哲學上に圓融論を唱へて客觀的存在を
 認め、一面にこれがコンデンスされて中心を毎自作念

或る時其爲めに泣いて寺の門に立ち歸つて父に訴へると
 父は反問して曰く、然らば汝は誰の子ぞと、考へて見
 ると矢張寺の子に違ひない、爾來僧の子たることを愧
 ぢたることはなく、中學に進むに至つて目的を問はれ
 し時僧侶と成り度いと速答し得たを喜んで居る、中學
 時代はクリスチヤンの江原素六翁の中學に業を受け、
 日々聖書を聞かされたが、益々日蓮主義の偉大なるを
 感ずると共に、佛陀の圓慈に浴するを得た、進んで誘
 或多き高等學校時代には、父より度々の音信毎に、本
 佛の愛子 陛下のみ實なる文雄に遣はすとの冒頭によ
 つて、自覺を興へられつゝ大學に入つたが、角帽を冠
 るよりも家に居て法衣を着けて居る方がうれしい、現
 代の如く僧風頹廢して居る時に、何故多くの僧は法衣
 を身に纏ふことを光榮に思はぬか、法衣を着けたるも
 のは諸天來つて之を護るとまで、大集經に説かれたで
 ないか、今こゝに衣を着けよといふは、僧俗共に信仰
 の節操を保てとの意義である、男も女も泰山鳴動すと
 も動かぬ信仰を持せよと希望するのである、併しなが

の佛陀に結び付けられた、而も佛陀も偏狹なるにあら
 ずして一切の神佛を融合し來りて本佛を中心とせられ
 た、又人をば基督教などでは罪の子とするが、聖人は潜
 在的の佛性を認めて、其顯動するによつて成佛し得る
 ものと教へられた、
 顧みるに日蓮宗の歴史は迫害の歴史である、然れど
 も今日に至るまで嚴烈なる信操を節持し一貫したので
 ある、一面には又大なる襟度を有つて居るが世人は之
 を知らない、而して門下の中にも多年の迫害に堪へず
 して軟化したのもある、今晚の會合の如きは門下の各
 派の人々であるが、私には何等の障壁あるを感じない
 予は予の父の喜びの囁きがあるやうに思はれる、
 最後に一言したい、佛は壽量品に於て情々理を考へ
 よなどゝはいつて居らない、汝等當に信受すべしと説
 かれてある、既に此世界は一佛の眼界に屬せるもので
 あるからは、理窟も何もなく、直ちに來つて此主義の
 前に信伏すべきものであると思ふ。

權威なき國民道德

村雲婦人記者 中山法城

今晚は、聖上陛下御不例の號外に國民一同驚懼措く所を知らず、一時も早く御快愉を祈るべきかゝる悲痛なる際に當つて、またかゝる悲痛なる演題で此會を終ることは如何かと思ふが、日蓮の弟子檀那は憶病にてはかなふまじく候との御金言により、平素見聞して居る所感を腹藏なく諸君の前に披瀝したいと思ふ、

頃者、國家統治の主權を犯し奉らんとした一大不祥事の結果として、三教會同の催しがあつたが、其結果が如何なる効果を生むかは測り難い所である、が其は兎も角も、現代に國民道德の頹廢して居ることは、如何にしても否定することの出来ないのは最も遺憾とする所である、ある中等教員を養成する専門學校で、國民道德に關する科外講演を開設した所が、其科外なる所以を以てか、一人の出席者すら無かつたことを先達關係ある人から聞き及んだが、予は甚だ面白からざる

れた不良少年などは多く中流の子弟である、處が上流は子供を産むと直ぐ保母に任せて自ら乳を與へず、下流は起きると勞働に出で遅く歸つて來るから子供に多く接しない、故に家庭の温味は中流の家庭に最も多かるべき筈の社會から、かゝるいまはしい少年を出すのであるから、實に寒心に堪へないではないか、されば内務省が二宮宗を鼓吹し、三教會同を催すも其効果甚だ疑はしく、道德は日々力を失ひつゝある、茲に於てか、此頹廢せる國民道德を勃興せしむるには、如何にしても我日蓮主義に其基礎を求めねばならなくなる我宗祖の國家君主に對する態度は、今晚十分に述べる時間が無いのは遺憾であるが、願くば諸氏が少しく此主義を研鑽さるゝならば、至る處に直ちに其熱烈なる態度を認め、自ら國民道德の涵養に多大の裨益を得ることゝ信ずる。

七月二十日午後淺草統一閣に開いた雜誌社講演會は定刻前四百餘の聽衆詰めかけ來り、白雲子の開會の辭に次で、水村妙教記者より願位廣長舌を振つて日蓮主義の光輝を掲げた、その後聽衆は、十時三十分閉會を告ぐるまで、一人も歸らなかつたのは、珍しい事實として注意せざるを得なかつた、

現象だと思ふ、又或る將校が兵卒に鐵拳を見舞つたが兵卒は鐵砲は前からのみ來させんと叫んだ、即ち戰爭でもあつた時は、將校が前進の背後から誰が殺したともなく狙撃するとの意味である、時に將校は吾輩は終身の職務たり、汝は義務年限の間のみ三年の辛棒ぢや、氣を傷めて呉れるなど答へたさうだ、將校といひ兵卒といひ何たる言語同斷である、國家の干城たるものが此の有様である、固より之は破格の事例ではあるが、此等は國民道德頹廢の一例であつて、吾人は懼然として恐れざるを得ない、又朝鮮の併合された時、總督府は朝鮮人に歴史の教授することを禁じた、由來歴史教授は感情教育で一種の修身教育であるから、鮮人に忠君愛國の思想を吹き込むと叛逆の恐れがあるからだといふ、然る忠君愛國は高山林次郎博士の所謂通一遍の忠君愛國であつて、かゝる意味の忠君愛國は、發展的日本の將來には到底用をなさないと思ふ、

日蓮主義の一斑

統一記者 井村日威

日蓮上人の主義は、非常に其範圍が廣いのでありまして、到底簡單なる時間に其全部を申述べることは不可能のことでありますが、其最後の結論を申し上げますれば、上人の主義は最も現代に適當したる主義でありまして、現代の思想界は此上人の主義によつて解結を與へられ、一步々々此主義に向ひつゝあるといふことは疑ひない事であると信するのであります、私の今晚述べんとする處は、此主義の根底に横はつて居る現實と理想とを最も圓滿に調和せる所以を明にして見たいといふのであります、或る宗旨の如きは此現實の社會を否定して唯理想の一端に走り、又或る宗旨の如きは唯此現實の社會に重きを置いて理想の世界を斥ける傾きを有つて居る、然るに日蓮主義は、此等の二つのものを全然相離して別々に其位置を捕へんとする主義にあらずして、巧に此現實社會と理想の世界とを調和せる主

義であります、多くの佛教は此人生を卑しんで人間はツマラナイとして、先づ樂みを求めんとするなれば此世界を去らなければならんと云ふて、眞言や念佛などは此思想を以て現實を卑んで居るのであります、如來一代五十年の教説の大部は、斯の如く説いて人生を卑んだのでありますか、驕へつて考へますなれば釋尊は何が爲に如此人生を卑しむ、此現實社會を卑しんだのでありませうか、是獨り釋尊の五十年間説化の組織を知るものによりて解結せらるべき問題であります、人情は如何に歴史を経るも變ることはないと見へまして、釋尊の當時に於きましても矢張人類は此人生に執して物質の幸福を求めて居たのであります、そこで釋尊は自己の主義に來らしめんが爲に、先づ極論に走れる現實の煩悶を極端に排斥したのであります、彼の倫理學史に於ける克己主義が一面の眞理を穿つて居る様に釋尊の此主義は最後の眞理に到達せしむべき端緒であつたのであります、恰度弓を矯めんとするには其正反對にしなければならん様に、人情の極端を矯正せんと

するには必ず此方法を要するのであります、現今日本の人情も種々なる方面に擴張して居るのであります、却々一片の修身教科位に於ては之を矯正することは困難であります、然し此他人を顧みずして唯自己の爲には破廉恥も敢てするといふ個人主義的の性情は、果してそれで十分満足することが出来るものであらうか、若し出來得るとするならば何の處に止るものであるかといふことを考へますれば、終に何の處に於ても満足することは出来るものでありません、物質の欲望は限りなきものであります、百圓を儲けたなれば五百圓を望み、五百圓を得れば又千圓を求めて終に満足する處はないのであります、粗衣粗食にあるものは富豪を見て満足せるものとするのでありませうか、彼は決して満足して居らん、一を求むれば二を求め之を追つて常により以上を求めて終に満足する處がないのであります、然れば何の處に於て其満足は達し得らるべきかと申すなれば、必ず精神的に之を得る方法を取らなければならぬのであります、茲に宗教の價値は存するの

でありまして、如何なる宗教も皆其安心立命を語る場合に於ては此精神を語るものであります、然し乍ら吾々の語る處の安心立命と云ふのは、決して人生を無視して居るのではありませんから、豫め御承知を願ひたい、斯の如くして釋尊は此物質の欲望を打破すると同時に其條件として人生は無常なり、苦なり不淨なりとして煩悶者の人生觀の様な咒ひの聲を擧げて此を卑しく説明せられたのであります、此に於て或るものは此人生をなげ出して虚妄の空理を理想とするに至つたのであります、是を佛教に所謂羅漢二乘（聲聞、緣覺）と云はれるのであります、佛教の中に於て今尙此主義理想を以て立つて居る宗旨が少くないのであります、否其大半は皆此思想の傾向のないものは少ないのであります、是等は要するに、釋尊の本意に非ずして、一時現實の執着を打破せんが爲めの所謂方便經であります、人生は斯かる主義を遵奉すべきでない、今一步眞理を進めて、吾人が理想の對照を此現實に惹き戻さなければならぬのであります、少くとも人類を對照とし

て起つた佛教である以上、悉く其説法は此人生を益するものとならなければならぬ、人間を救ふにあらずして人間を捨てる目的なれば、此處に結論は附て居るので、最早一言を拵む餘地はないのであります、其目的が此處に存しない以上は議論を茲に止めて置くことは出来ないであります、宜哉、釋尊の教説は明に其論結すべき處を示されて居るのであります、法華經は即ち是であります、此理は從來下したる人情を引き上げ、又空想に走りたる二乘羅漢を引き下げて、正に吾々の辿るべき態度を明にしたのであります、そこで今迄の教説とは全く反對なる觀察を下して、其本質には光明赫々たる佛性の玉を抱けるものである、然るに吾々は此尊き玉を抱けることを知らずして、所謂玉かけながら此立派なる本質を忘れて、自ら自己を下して罪惡の巷に變轉輪廻を繰り返して居るのである、今茲に罪惡と云ふのは、決して世に所謂罪といはるゝもの斗りを意味するに非ずして、單なる現實主義と云ひ、又單なる空無を憧憬せる理想主義の如き、偏狹因陋な

る主義思想を悉く罪惡といふのである、即ち是等の思想は人を誤まり、社會を誤るものでありまして、世に最も警誡すべきもの世に最も恐るべきものは是等の思想であると思ふのであります、墮落は教へがなくとも自然に之に向はんとするものであり、又現實我の見るが儘の自我なれば教を俟たずして自らは了解するので、教への尊き所以のものは即ち此光輝ある自己を知らしめ、進むべき道を示す處に存するのであります、理義實に斯の如きものとするなれば、吾々の正に辿るべき正路は、即ち此法華經に來らなければならぬのであらうと思ふのであります、此法華經は佛陀五十年間説法の最後結論としての教説でありまして、佛陀の主義は遺憾なく此理に於て披瀝せられてあるのであります、以上佛教思想の大綱と法華經の主義と及び其位置とを論じたのであります、抑も日蓮主義とは如何なる經典を基礎として立つて居るかと申しますなれば、即ち此法華經を基礎とし此經典の主義を掲げて立つて居るのであります、換言すれば日蓮主義は釋迦牟尼主

義であり、法華經主義であるのであります、

我日本帝國も物質文明の餘波を蒙つて覆ふべからざる破綻と弊害とを生じて居るのであります、即ち一方には華嚴淺間に身を投ずる青年を出して、世は悲觀厭世の聲を高くして居るかと思へば、一方には社會共產の主義を唱へるが如き、物質の文明終に満足を與ふることを得ずして破綻百出して居るのであります、此時に於て社會をして復活せしめ、人心をして勇氣あらしむるものは、唯獨り日蓮の主義あるのみであります、日蓮主義は決して固陋なる克己主義を唱へないので、唯其情緒自ら己を誤ることを怒らずして怒むのである而して之を啓導せんと努むるのであります、人生は欲望に依つて成立せるものでありまして、如何なる真理も學説も此人情を全く打破せんとせるものは、到底此活ける社會には容るゝことは出來ないのであります、諺にも「欲の袋に丈けがない」と申しますが、全く金がたまると使いたくない様になるさうであります、何程ためても死と共にいとしい金にも別れなればならん

のでありますので、金ををためるも至極結構であります、すが、そこには餘程の意義を要するのであります、金ばかりためたがる人を強欲だと云ひますが、實際考へますればまだしも至つて少欲であると思ひます、大切なる我、眞の生命の爲に名譽も生命も忘れる様では、未だ小人の域を脱しない人でありまして、君子は永久の生命を得なければならぬのであります、我此人生五十年は三世を貫く永遠の生命の活動の一瞬間に外ならんといふ、此大白覺と大欲望があるなれば人生五十年何の恐るゝに足らんのである、人如是なれば、そこには悲觀もなく煩悶もない、天地に瞻仰して恐るる所も憚る處もないのである、如是にして自己の價值と其位置を知り、宇宙無限活動の生命と一致するなれば、此現實に執することなく、又徒に死せる空理に捕はるゝ、ことばない、況んや行住坐臥吾人を見とせ給ふ久遠實成の釋尊牟尼佛、常住一切の三寶は、其信念の住する處に在するのである、以上述べましたる如く、其主義とする處は最も廣漠にして而も最も深く、最も高く

して又最も近いのであります、是が即ち法華經の圓頓主義でありまして、同時に日蓮上人の主義であります、



日蓮主義者の態度

日宗新報記者 清水 歸 一

私は今宵一席の講演をすることを無上の幸榮とするのであります、俄然我 天皇陛下には御不例に在らせられると云ふ號外を手にして已來、七千萬の同胞は最も襟を正して謹慎の意を表し奉るべき今日であるのであります、若しも不肖なる身の叶ふなればおそば親しく侍し奉つて御看護申上度く存するのであります、止むなく三寶の御前に正坐して讀經靜かに御平癒の祈願を捧げ奉つたのであります、我同胞は凡て憂愁の眉をひそめて、暗雲空を覆ふ今日今晚、不肖私は御祈念の微衷を抱いて計らずも此見ず知らずの演壇に立つて一場の講演を致すに至つた、嗚呼人生は無常なものである、如此きの變遷は日々吾等の眼前に踵を接して來り、而して吾々は皆此無常の穢弄物であるかと思ふと又一入の感慨に堪へないのであります、が然し此變化あり無常なる社會は、即ち日蓮主義の活對象である、

を上人に謝したのであります、元來私も日蓮門下に身を置く一人であります、然し日蓮僧侶の態度は氣に喰はない、何でも來たら一ツやり込めてやらうと云ふ様な態度であるが、全く古來法華鬼助と云ふたのも無理はない、然し之は上人が唯獨り多數の法敵を身に受けて大法戰を交へられた處より、世人の悪口にこんなことを云ふたので、上人は又一面非常なる御謙遜の方で在らせられたと云ふ事を知らない誤解より起つたものである、然らば上人には何處に御謙遜の態度があつたと云へば、私は慥かにあらせられたといふことを信する、何故かと云へば、上人は本化上行菩薩の化身にあらせられたと云ふことは一般に之を認むる處であるが、苟も身上行菩薩で在らせらるゝ以上は、如何なる處に生れ給ふも其欲する處に従つて自由であらせらるるものを、何が爲に大日本國は安房國、安房の國の中には、而も漁夫の家に御生れになつたものであるか、之儘かに其御謙遜の徳を表示して居られるのである、上下の階級差別の甚だしき時代に於て、家もあらうに

此變轉極りなき對象を捕へて、に偉大なる眞理を發見せんとするのが、即ち我日蓮主義である、吾々は一轉一倒する度毎に一步々々日蓮主義に來つて、最後の解結を聞かなければならんと思ふ、私は先頃早稻田大學の陸上運動會を見にいつたが、其餘興の最後に於て、日蓮宗の大發展と云ふのがあつた、私はどんな面白い趣向があるかと待ちかまへて居ると、先づ最初に大鼓が出て來る、其次には武裝勇ましい加藤清正が出て來る、其次に男女學生、僧侶と云ふ順序に繰り出して來て、最後に出て來るのは何であるかといふと、乳母車に乗つたカツイ坊が車の内で太鼓を打ちながら引かれて來た、ものもあらうに世にも排斥せらるゝカツイ坊とは何事ぞ、あゝ早大學生の日蓮宗の大發展とは是であるか、苟も身を教育界に置きながら日蓮宗を知らざること此如きかと、我知らず其淺間しさを悲んだのであります、自ら太鼓の盛なること、御祈禱の盛なることが日蓮宗の發展であると考へて居るから、世人が之を誤るのも無理はないと、又も苟かに其大罪

漁夫の家に生れられたと云ふことは、其御謙遜の徳に充ちて居られたと云ふことを伺ひ奉らなければならん、上人を唯亂暴一天張の怪僧の様に思ふのは未だ上人を語るに足らざるものであると思ふのであります、由來人情は謙遜を喜ぶ風のものであります、頭を下げられると割合氣持のよいものであります、殊に此日蓮の門下としては、此謙遜の態度に就ては大に注意しなければならんと思ふのであります、然し一面身を立てんとする場合に於ては、頗る嚴格にして道を求むるには虛心我を去らなければならんと思ふ、一天四海皆歸妙法の理想を實現せんとするには、殊に此修養を要するのであります、私は彼の基督教徒の態度には學ぶべき處があると思ふのであります、即ち道を通る人迄も之を引いて、教に入れんとして孜孜として道の爲に努力して居るが、如此き例は他に於て多く見ざる所である、況んや吾々日蓮の門下として南無妙法蓮華經と唱へ、釋尊の本懐たる法華經、法華經の中に於ても壽量品の久遠本佛の大慈悲に浴せんとするものは、大に

此に鑑みる處がなければならぬと思ふのである、熱誠は終に人を動かすが、理窟は却々人を動かさないのでありまして、日蓮の門下たるものは、内には此至誠正法の信仰に住し、其僧たると俗たると、男子たると女子たるを問はず、常に欲問具足道の正路を辿つて、刻日蓮上人の眞精神に進まなければならぬのでありませ、今一言にして申しませるならば、日蓮主義者の態度とは世人の觀る如き所謂ドンドコ法華の如きものに非ずして、内には燃ゆるが如き精神光輝を藏めて一澄喇たる勇氣があると共に、又一面大なる謙遜の美德がなければならぬのでありませ、斯の如く我日蓮主義の態度を明かにし、而して勇猛の氣魄を開展して努力すべきである。

蘇生せしむべき現代

活宗教記者 神代 智明

心配は命をけづるかんな哉

此災々として肉を銘かす様な季節に當りまして、かくも多数の御來會を辱ふし、吾々同志が入り變り立ち變り御話申すすることは甚だ御困難なる事であらうと御察申上げるのであります、世には健康なるものが少ないと見へまして、駿河臺の病院や大學病院には、いつも患者が満員でありませすが、之等は皆心配のかんないで命をけづつた人であると思ふのであります、蘇へつて此度吾々は宗門下雜誌記者の合同致しました事は、之等精神界の病菌を一掃せんとして起つたのであります、其合同致しました、本門と云ひ顯本と云ひ又は八品と云ふ様な各教團は、區々たる形式修行の上に於て、或は教義上の小義を争ひ、お互に相反目の状態を以て幾百年の歴史を経て今日に至つたと云ふことは、お互に恥づべきことであらうと思ふのであります、今

や、我日本帝國も世界の舞臺に立つて活動しなければならぬといふ時代となつたのでありまして、國民たるものは其職業の何たるを問はず、國家の天職に向つて奮勵努力して行かねばならぬ時代であらうと思ふ、然らば我國の天職とは何であるか、曰く世界統一であります、日本國にして日本國を治めて行かなければならぬことは當然のことである、進んで世界を治めると云ふことが、即ち我日本の天職であらうと思ふのであります、之れ云ふ迄もなく、上一天萬上の御力によるべきであります、下吾々臣民は此聖業を輔け申さなければならぬのであります、生れ變り死に變つても此天職を御輔け申すといふことが、吾々の天職であると思ふのであります、然るに動もすると、社會主義の如き思想を出すことがある、之等は大に警誡すべき思想である、我日本臣民は如何に日本に生れて來たかといふことを考へなければならぬ、此考へがなくして三度の御飯をたべて居る人は日本に死に、來た人で、日本人としては死で居るのである、少くとも我國民たる以上

は、我御國體は他國と如何なる點が如何程に異なるか位のことは知らなければならぬ、由來日本は偉い國體である、神后皇后、加藤清正の外征と云ひ、蒙古の來襲に僅かに三人を残したるが如き、又は日清日露の戦役と云ひ、天祐と人力と相俟つて常に凱歌を奏して居る其兵器に於て糧食に於て我に幾倍せる敵軍を破るから真に日本は偉いに違ひなひ、而も之が腕力を以て偉いのではない、彼の酒地肉林を以て無道を極め、萬民よりは『此日何時か亡びん』と咒ひの聲を擧げられた。般の紂王は、文王一度怒つて天に變つて誅罰を加へたが、徳は孤ならず必ず隣ありで返つて萬民の歎待する處となつたのである、我國は其全體を丸めてかゝつても、之を歐洲各國に較べるなれば豆粒位であるが、而も世界を一統する權威を有つて居る、世界の文明を調和せしむべき天職を有つて居るのである、噫、忠臣楠子之墓と祭らるゝ正成の勳蹟は、萬世に輝いて居るのであるが、近くは日清日露の戦役に於て武勇を海外に轟かしたる我忠良の臣民も、共に威名は萬世に朽ちな

いのである、如何に科學の進歩が軍艦と軍艦の戦争より進んで、空中の戦争となる迄も、我日本帝國は必勝の武器を有つて居る、其れと同時に必ず學ばなければならぬものは、我日蓮上人の特殊なる戦争である、徳は敵をして身方となし、人を守り人を活かすものであるが、劍は人を突き人を殺すものである、然も正成之を握るなれば忠君愛國の武器となり、小人之を持つなれば暴悪無道の兇器となる、刀其ものには善悪はないが、其徳によつて力に善悪を生するのである、十圓の金は、吾人が持つても、貴族が持つても、十圓以上には通用しないが、若し之を十二圓に使ふとすれば、家を穢がし名を穢がし、終に身を亡ぼすに至るのである、今夜の様な演説會には唯でもよいが芝居となるとそうにいかない、芝居なればまだ好いが、まかり違つて酒ホールへでも這入ると、だん／＼面白くなつてツヒ其悪い氣が出ると、金が足らなくなる、始のうちは親の元から出して居るが、しまいに他人のもの迄も取つてドロ棒といふ罪惡を犯す様になるのである、處が

である、妙法蓮華經は其意義深遠にして難解であるが最も之を簡單に言へば、即ち吾人はそれである、日蓮上人は妙とは蘇生の義なりと云はれてあるが、恰度柔道の先生が活をいれると同じことである、法とは世界の有ゆるものを指すものであつて、直接是に觸れるなれば人を殺す處の電氣も之を活用すれば團扇となり、米搗となり、甚しきは安摩となる、學者の説によると雷も却々大事な役をして居るのであつて、夏になると植物も非常に此營養分に渴して居るから、天も之を感んで盛に雨を降らすのであるとのことである、故に之を活用し蘇生せしむると否やとに於て、人類は幸福を受け又災害を受けるのである、法は妙なり妙とは蘇生の義なりとは即ち之である、人間もあまり喰ひすぎると病氣になり、水の如何によつて田も稻穂を左右するので、大喰をして寝て居ては人間は馬鹿になる斗りであるから、常に中庸を取らなければならぬ、之が即ち蘇生と云ふことである、寝て居て喰ふことは誰でもあまり悪くないが、佛教は此邊の情を制してある、此意

近頃の様には米が高くなつて日本に生れて居りながら、日本の米を食ふことが出来ないといふ様なナサケナイ時に、若し米でも買つて人助けをしたなれば其の時は餘り人は騒がないでも、此人間らしい行は永久に亡びないで、どうかしてあの人を市會議員にしてやりたいものだ、區會議員にしてやりたいものと云ふ様になるのである、一方は社會より歓迎し喜ばれるやうになり、一方は社會より放逐し悪まれる様になつて来る、十圓の金には違ひないが、其十圓の金が徳となると不徳となるとは其間髪を容れないので、之は大に考へなければならぬことであると思ふ、日蓮上人が智者のとぼせる火も愚者のとぼせる火も違はないと云はれておるが、唯其異なる處はとぼり様一つにあるのである、灯掲でもそうである、餘り足元に近くすると燈臺元暗しで返つて其用が足りない、内面の徳には相違はないが之を善用すれば力を納めて敵を伏すことが出来るのである、進んで敵兵をして我帝國の臣民たらんとせしむることも、皆其責任は我々同胞の雙肩に懸つて居るの

義より云ふなれば克己といふことは又一種の蘇生の意義がある、家庭の圓滿は天國の樂園なりといふてあるが、然し夫婦喧嘩となると餘り妙でない、夫婦は相敬し、君は臣下を慈しみ臣下は又君を思ふといふ處に妙はあるものである、人道と云ひ人倫といふも、つまり之を云ふのであると思ふ、正成や清正の行爲は妙であり、死して護國の鬼とならんと誓つた廣瀬中佐も妙である、敵弾命中して、尙進軍喇叭の音に至誠の眼を開く一兵卒の行動も亦妙中の妙であらう、又吾人が其識分を守りて精力を盡して居る處も妙であれば、泣く兒に乳も妙である、天下到る處妙の存せざる處はないのである、吾人は此妙中に生れてそこに各自天職の妙を實現せんとする處に活き甲斐があるのである、唯無暗に金をためるのも妙でないが、殊にドロ棒を持つていかれては愈以て妙でない、金殿玉樓も用はない唯足りるを以て妙とするのである、妙といへば如此き意義があるが、之は決して日蓮宗の專賣ではない、天地開闢以來存するので、何處で何物を捕へても其處に

日蓮上人の風格

統一記者 三 上 義 徹

妙は存するのである、故に妙を名けて具足の義とも云ふのである、此妙は唯個人や事物の間に於てのみ發見すべきものでなくして、是を大にしては國家の上に於ても發見しなければならぬのである、然し是は國民が寢て居ては決して妙は出て來ない、國民は一致共力して大に發奮努力しなければならぬ、國民互に正義と忠愛の觀念に依りて進むなれば徳は孤ならず必ず隣りあり、我七千萬の同胞は各自此雙肩に負へる責任を自覺して、我帝國の使命に努力するなれば、世界統一の天職は期せずして全ふし得られるのである、我日蓮上人は此國民的大自覺の體現者であり、代表者である、吾々日本帝國の臣民は、此日蓮上人の抱負と活教訓を體して日本帝國の戰士となり、上には天祐を奉じ、下には至誠以て人力を盡し、我帝國の使命たる世界の平和統一の天業に向つて奮闘努力せられんことを望みますので、即ち蘇生せしむべき現代といふ演題を掲げた次第であります。

日蓮上人は、決して大日と云ひ彌陀と云ひ、又基督教や儒教に稱する神や天と云ふ様な、ホーとした影の様なものでない、日本歴史上の實在的人物であつて、今現に關東の各地に靈蹟を有つて居る日蓮上人である、而して日蓮上人の大精神大活動は陸離たる光彩を放つて居る、此歴史上の大偉人を忘れ去りて、所謂お難有主義を以て神祕の眞義を誤り、殆んど迷信的に鼓吹すると云ふことは大に考慮すべき問題であると思ふ、

近來日蓮鑽仰の熱火は、焰々として天下各方面に燃へては居るが、又其人によりて觀たる半面的批評も甚だ多い、彼の木下尙江氏の日蓮論の如き、即ち上人を叡山の系統を継げる官僧なりと批評して居るが、之等は未だ上人の風格を解せざる僻論であつて一顧の價がない、

日蓮とは何ものぞ、斯かる問題を提供するならば、誰人なりとも六百年前房州小湊に生誕せられたる男子であると答ふるであらう、日本人であるならば親鸞の徒でも法然の徒でも又弘法の徒でも、基督教徒でも然

私は貧乏籤を引いて最後になりましたので、語らんとする所は已に同人によりて述べられました、而して私を見る所によると、世人の觀たる日蓮上人は未だ其一面であつて、全面の日蓮上人を窺ふまでに到達して居らぬ様に思はれる、

釋迦とか日蓮とか申しますと、世人の多くは唯だ奇蹟ある御難有主義とのみ考へる様であるが、勿論斯かる觀念信仰は悪くはない、而して科學の進歩と理性の發達とは、漫然として捉ふることの出來ない不透明なる神祕を許さない、さりとて如何に科學が進歩し文明の度が高まつたにしても、此神祕的宗教思想の亡ぶることは永久にないのである、凡そ宗教成立の基礎として信仰意識頗る透明に、而して必ず神祕の部面を要するのであるが、現代宗教の中には此神祕の觀念が不確實なる立脚に在るものが少なくない、我輩の言ふ所の

か答へざるを得ない、眞に然うである、安州に生れて歳十二父母の膝下を離れ、清澄山に入りて出家したる日本男子である、而して彼は乾々草々研究の歩を進めて修まなつたので、十五歳の時とはや、一山の碩學能く彼を満足せしむることが出來ない、故に彼は親しき故郷を後にして叡山南都三井に遊び、八宗九宗の研鑽益々深く進むに従ひ、旺盛を誇れる當年佛教の主張に對して、未だ以て信仰と道徳王法と佛法との問題を解決融和するに足らざるを洞徹し、先づ法華經の眞意義より國民道徳と信仰との調和を試み、獨り釋尊を奉じて立正安國の大義を懐き、歳三十二、故山清澄山頭に開教の宣言を爲されたのであるが、鎌倉當年の各宗教は國政大義名分を誤りて人心腐敗に沈みつゝあるを見て、何等救済指導の方途に出でなかつたので、上人はそれ等各宗教の根底に向て大鐵錘を加へたのである、而して其一言一語は悉く宗教改革の聲であつて人心啓導の叫びである、従是幾多の迫害は競ひ起り腕力的暴行を受けたのであるが、之等の迫害も上人に在りては

苦痛でない、寧ろ反て快哉の態度を持って富めるものなりと欣ばれたのである、さればにや叱咤の警鐘は四箇の格言として表はれ、而も用捨遠慮もなく鎌倉天下の浦々までも響いたので、所謂官僧と賣僧とは狼狽して北條の一家と結び上人を苦めたのである、斯の如く上人の大運動には大なる悪魔の一團が反抗妨害を試みたけれども、而しながら大難色増すことに勇氣百倍して益々剛健の風格高く、我日本の柱とならんと云ふ大確信の前には、一切の人を畏服せしむるの活ける靈力を包有して居るを見る、四條金吾頼基が龍の口の大難に際し冥途の御伴を誓ひし時、「不覺の殿原かな是ほどの喜びを笑へよかし」と言ひ放たれた一語は、何れも共に取て以て三省すべき大文字である、諸君靜かに之を思ひ、身首まことに處を異にせんとする一髮の間、從容動かざる剛健の態度は吾等の學ぶべき好典型ではあるまいか、彼の基督が十字架上に昇らんとするに際して、オー神よ神よ神は我を捨て給ふかと最後の嘆聲を洩したると、「本より存知の旨なり」との上人の聖句

ない、又日蓮主義者の取るべき所でない、殊に吹けば飛ぶ様な人々の多い現代に於ては、其學生たると紳士たるとを問はず、此空前の偉人格の活動を敬慕しなければならぬ、其と同時に又其活動の因て來る所の根底的信仰に進まねばならぬ、たゞ厄除けの日蓮起の日蓮と云ふ様に昇ぎ廻る事は、依て以て益々上人の人格を庇つくるものであつて道を昧する一輩と言はねばならぬ、斯かる一輩に對しては、吾人は今後何の用捨も遠慮もなく筆と舌とを以て折伏を試みるであらう、要するに、諸君は安房の日蓮上人の風格に接し、而して本化的日蓮の靈格を欽仰して修養の途を辿るべきである、唯漫りに神祕的に難有がつて現證的に見ようとするならば、反て上人を誤るに至るであらう、終りに臨み諸君が各講師が長時間に亘りて講演せられたるに對し、清聴を辱ふしたることを、同人一統に代りて感謝を表します、

七月二十一日午後神田和強樂堂に開いた求道の青年士女三百餘名、各紳士の懸ゆる如き熱烈の大法壇に聽衆をして偉人格敬慕の念を起さしむ、

と對照し來らば、愈々益々欽仰敬慕に堪へざる風格であつて、深く吾人の味識しなければならぬ所である、彼の伊豆の浪に葬らんとし、或は佐渡の孤島に失はんと企てたる北條も、終に上人風格の偉大なるに畏伏して田圃と殿堂とを以て供養せんと悔ひたものではあるが、上人は信仰なき庇護を潔しとせず、袂を拂つて身延の山深き所に草庵を建て、門徒に教義を傳へたのである、古人の言に「衣を萬里の岡に拂ひ足を千里の流れに濯ふ大丈夫此氣節なるべからず」と云ひ、又西郷南州が「金もいらぬ名もいらぬ人ならでは國家の大事を語るに足らない」と絶叫したが、男子たるもの須く此體の自覺がなければならぬ、吾人はこの風姿を思はずには居られない、日蓮上人一代の活動、今現に吾人の眼前に情夫を起たしむる靈氣を與へて居る、吾人が度で上人の風格を仰ぐならば、そこに潑瀾たる靈氣に充たされて、剛健の風も精進の勇氣も沈着思慮の態度もおのづから養ひ得らるゝものと信する、私は團扇大鼓によりて崇拜せられ祭り込まれる上人を認むることは喜ば

日蓮主義と家庭

みづみ記者 新 甫 寛 實

「めぐみ」の記事は婦女子にも解し得る程度を以て主意とする故に、今晚も議論を避けて平易に述べましよう、家庭問題は現今社會の重要問題の一にして、種々の方法を以て圓滿を計りつゝあるが、今なを其當を得たるものはない、家庭に於けると學校に於けると兒童の精神は異つて居るので、家庭に在つては學校教師の教訓などは多く用ひて居ない、其は何故であるか、即ち信仰を根底としないからで、信仰なき時は如何なる家庭でも圓滿なものはない、彼の財産などで圓滿が得られるなど、思ふて居るのは大なる謬想である、於茲予は日蓮主義の信仰を家庭に應用しなければならぬと信する。

聖祖は吾人の謂ふまでもなく、何等後援者もなき單獨にして富貴ならぬ小湊の磯旃陀羅の家に生れられたが、其言は句々皆吾人の龜鏡となる、實踐躬行主義で

剛直言を曲げず、山陽が承久の事は言ふに忍びずとまで評せし横暴專斷言論の不自由なる北條の世に、所信を貫くには眼中上下なく、王土に生れたれば身は随ふとも心は従ひ奉らずといひ、大難の眼前を知りつゝ、諫曉を廢せず、恁る心掛を以てすれば人は社會の何れの方面にも打ち勝つことは出来る、凡そ人は惡事を爲さぬといふ丈けならば木偶と同じであつて、善事を敢行してこそ萬物の靈長といへる、それには此日蓮主義の精神を忘るゝことは出来ない。

又奇體な家庭がある、先達目黒の或る大家へ參つた所が、其家は主人夫婦の信仰を異にせる爲め、其が原因で時折家庭の平和を破るのである、此は信仰を以て家庭の基礎としない適例である、又予は實際の目撃によつて平素無宗教を標榜して居る人も尙信仰心の潜在して居ることを疑はない、予は日露戦役に從軍する時命さへあつたら何等か土産を齎したいと思つたが、出征の軍士は豫後備は僅かで平素神佛に手を合すことを嫌ふ年輩の現役が多数であつたにも拘はらず、朝起き

八風に侵されぬのを

賢人とは申す也

布教記者 宮 田 泰 岳

初め予は最善の宗教と題を出す考であつたが、山根師の題意と同じやうに思はれるから斯の如き題を掲げた、併し之を一通り述べるにしても長時間を要するから、今晚は其一部だけを話すことにする。

此題は宗祖遺文の一句であつて、吾人が處世上の座右銘として味ふべき聖訓である、現代は物質文明の發展と日露戦勝の餘響として、一面には厭世主義又は社會主義等、イマワシイ惡思想が侵入しつゝあるので、自殺の如きに至つては、流行的に且つ競争的にさへなつて行く、又個人主義も益激しくなつて行く、此徳義風教の頹廢をば何を以て救済したらよからうか、勿論日蓮主義によらねばならぬが、また八風抄を座右銘とすることが最も宜しからう、

此等は日蓮上人が龍口の刑場にて若し首斬られ給ひ

ると或は西に或は東に向つて合掌默禱して居るのを見た、で凱旋の際如何なるものにも信仰心のあること、及び宗教の必要なることを此例を擧げて將校以下の軍士に注意して置いた、

然るに遺憾なことには戦闘中は思はず信念を發動したものが、休戦中布教師の講話には既に耳を傾けないといふ有様である、これは偶々の休戦であるから六ヶ敷いことに耳を借すことが嫌いのでもあらうが、一は戦闘中の事を忘れるからであらうと思ふ、でありますから諸君も心の中にある信念を隠さず、正直に表はして貰ひたい、そして子供を教育するにも此心がけて信仰を以て一切の基礎とすることが必要である、信仰は決して難いことでも何でもない、婦女子にもよく之を味ひ得るので、我雜誌めぐみも平易簡明を主意として發して居る次第であるから、何うか諸君も偽りなく且つ勇猛に此信仰を味識躬行して貰ひたいものである。

なば、自分も亦直ちに腹掻き切つて殉死せんとまで覺悟せし我門下信徒の模範として歌はれつゝある彼の四條金吾殿に與へられたもので、彼れ四條金吾は直接に受けた迫害も無く、法華經を信するが爲め主人江馬殿から勘當をまで受けたが、而も信念の動がさること泰山の如く、遂には主人をまでも、法華經の信仰に導いた人である、即ち聖人が此人の爲めに人の精神を侵し動かすものは八つありこれを八風といふ、此八風に動かされざるものを賢人とするが教へられたのが此御書である、八風とは、一には利であつて、人が利欲の爲めに果敢なくも侵されつゝあることは、常に人々の實見し又は經驗しつゝある所であらう、利欲とは金錢のみならず酒色等の一切の欲である、全國幾萬の在獄囚人或は身は國會議員の要職にありながら裸體の辱めを受くるもの等殆んど利の爲めならざるはあらず。

第二は衰の風で、凡そ人は何時も得意の時代のみ積くものではない、寧ろ失意不如意の時が多い位である其失意の時にも失望落膽の極正道を踏みまぢがひない

やうに心掛けねばならぬ、書生が試験の不首尾から、下女が主人から叱られ、妻が良人に叱られて自殺する例も多い、又心から身に疾を發す人もある。第三は人の陰口を氣にして心亂れて喧嘩をする、之を毀の風に侵された人といふ、第四は譽で少し譽められると直ぐ調子に乗つて誇る事のないやうにせねばならない、日露戦争中の上村艦隊などは克く二種の風に侵されなかつた適例であらう、第五は稱で目の前に於て讚め稱へられて謙遜の美德を失ひ、第六は讓で目の前でせしられて怒る、第七は苦で小人は窮すれば茲に亂す、第八は樂で逸樂に淫する、以上の八種の亂に侵れないものを賢人といふのである。

宗祖が佐渡の御流罪から赦されてお歸りになつた時愛染堂に莊田一千町を附けて聖人を別當に封するから念佛無間をやめて唯専らに法華經をのみ弘め給へと頼まれても應せず、又龍口の刊場に毒及の露に消えんとする刹那にも、娑婆の穢身を金剛不壞の淨身に代ゆるは石を以て黄金に代ふる如きものであると悦ばせ給ふ

現代と日蓮

統一記者 山根 日東

現代の病弊に就ては宮田師か述べられたから、予は三大徳目を擧げて直ちに聖人の御事に移らうと思ふ、さて維新以後物質的文明の夢醒めて精神修養に重きを置くに至り、種々の方法をも講究せらるゝが、予は現代の人には今少し大なれ、而して強かれ且つ正しかれとの三大目を擧げて之に資せんと欲するものである。第一の大なれとは、日本人の未だ島國根性が抜けず人生の目的も小さく小成に安んじ過ぎる、少し金が出来ると直ぐ蓄妾だ別荘だ騒ぎ、小さな名譽を得ては躍る程喜び、得られないと非常に失意する、學生は學校を卒業すると忽ち邪道に踏み込むといふ有様であるから、大成をしない、我國民は然る小成に安んぜず益々努力して大成を期せねばなるまい、林子平の詩に『不_レ到_二芙蓉_一、_レ寧_二謙_一、_レ乘_二山_一、_レ紅_二日_一、_レ飛_二掌_一、_レ上_二人間_一、_レ天_レ未_レ曉』といふのがあるが、全く富士の高嶺に登つてこそ衆山

たのも、皆八風の爲めに法華の正道を曲げられなかつた好例であらうと思ふ、以上は六百年以前の教訓であるが、予は寧ろ其當時よりは六百年後の今日にこそ必要な教訓であると思ふ、吾人は此複雑なる人生に處して誘惑に陥らぬやう此金言を座右銘となすべきである。



の小なる所以も解るが、愛宕山や道灌山位に上つたのでは未だ山へ登つたといへぬ間に直ぐ下りねばならない、人の目的も亦然かく小なるものを以てしてはならない、又目的に就ては世間では立志といふが佛教では發心といふので、目的は此初の發心の一念が大切である、吾人は諸君と共に偉大なる目的を持ちたいと思ふ次に強かれとは、是が天下の公道だと信する所に隨て最も堅實に凍たる勇氣を鼓して進まねばならぬ、些少の妨害の爲に所信公道を迂るやうでは大事は成就しない。

次に正しかれとは、邪は寸毫も免さず正々堂々として垣を砥の如き大道を闊歩せねばならない、然らば吾人は如何にして大に且つ強く且つ正しく進むべく修養するか、古句に『足跡を忍べばやすし雪の道』といふのがあるが、實に偉人先輩の跡を忍んで進むことは最も必要であると思ふ、然り而して其偉人とは如何なる人か、予は智情意の圓滿に發達し而も最も意志の強き人を撰びたい、今此定義を以て古今偉人を

求むる時は實に日蓮聖人を以て其人とする、此は予の我田引水にあらず、實に聖人は一宗の元祖にあらず又末葉にもあらず、國家民性の爲め將に神の爲め道の爲め活動せられたもので、我國史より頼朝や秀吉を除くよりも聖人を除くは最も寂寥を感ずる所にして、偉大なる聖人の出現は實に大和民族の誇といはねばならぬ予は諸君に此偉聖日蓮の研究を切に勸望する。

諸君今兩國驛より乗車せば一日にして小湊に達すべし、是れ聖人が孤々の聲をあげたる地である、又新橋を發すれば三四時間にして鎌倉に着すべし、是れ六百年前幕府の政權を弄せし都市の跡にして、又聖人が單身獨立四面楚歌の中に活動せし舊蹟史實は、今尙昔の如く現存して居る、聖人は其意志の健實なる其情操の高潔なる實に天下に冠たり、又理性に至りては鑽れば彌々堅く仰げは愈高き世界的大人である、予一兩日以來陛下の御病惱の平癒を全心込めて祈りつゝありて聲暖れたる上、今晚は時間も無いから此等を十分に説明し得ないのは遺憾である、兎に角何を措ても先づ聖人

舶來の提婆と和製の榮特

村雲婦人記者 兒 島 宏 遠

釋迦に提婆乞食に風は世の附物で、仇同志の如く思はれて居るけれども、提婆は釋尊が修行上最も必要なものにて、日蓮聖人に於ける平左衛門尉等の如く、彼あるが爲めに釋尊も功德を積むことが出来た、提婆は學智勝れ六萬法藏を辨へ十八變を現じた程の人で、提婆に釋尊が正等覺を得られたのも彼の爲めなりと説かれてある、併し彼は有解無信の者で、反之榮特は自分の名さへ知らず、三ヶ年に十四字を暗んずることの出来なかつた程愚鈍極まる無解者であつたが有信の人であつた。

今現代を考ふるに「世の中を渡り初めて今ぞ知る目あき千人盲千人」といへるか如く様々であつて、提婆の如きものも澤山ある、先達水戸へ行く途中、列車に田舎紳士が其妻から見ると賣笑婦の如き婦人を伴つて椅子一杯に陣取つて酒宴を始め、途中の驛から乗り込んだ老婆の頼むにも席を譲らない、隣席の書生が見兼

を研究されんことを諸君に希望する。

六百年前大宗敎家の輩出稻麻竹葦の如かりしも、北條一門が政權を私握して三天子を配流せし暴逆に對し一人の克く之を諫めしものなき世に、聖人は獨り大義名分を主張し、「隱岐の法皇は天子ぞかし權の大夫殿は民ぞかし王の門守二疋候」等と直言以て君臣の分を明せしなど、千萬人と雖ども我奈何との意氣の活躍せるを見るではないか、此邊を觀ても聖人の偉大にして強く大に且つ正しく智情意の圓滿なりしことを知り得るのであらう、冀くは修養に志す諸君、此聖人の蹟を忍んで此三大徳目を達せられんことを。



ねて席を譲つたのを見て肖ッンとして居た、私は斯る者を舶來の提婆と名けたい、然らば和製の榮特とは如何、昨年の吉原大火の砌予は孤貧の收容所を巡視したが、其被收容者は皆身一つ命からんゝ逃げて來て居る中にも、先祖の位牌と本尊とを漸く懐にして居るものがあつたかゝる者を榮特といつてよからうと思ふ。

世の中には宗教を研究して其堂奥に入らんと欲するものがあるが、其人の平素の行爲を見ると其殊勝らしい言とは天地の差であるものが多い、其やうな人は日蓮主義者であつても其病狀は却て世を毒すること多大ではあるまいか、反之和製の榮特のやうな人は其信仰はよいが迷信に陥るものが多い、故に吾人の理想とする所は、理智の門より入るものは信仰を養ふことを忘れぬやう、又一面感情より入るものは智を研くことを怠つてはならぬ、宗祖が實相抄に「行學二道をはげむべし行學絶へなば信心あるべからず」と仰せられた所以は此處である、されば有解無信無解有信何れにも偏せず兩短所を捨て、兩長所をとり以て圓滿なる信者たらんことを希望する。

日蓮主義と文明思潮

法警社記者 石田顯隆

私は本日要用の爲めに横須賀へ参り唯今歸り着いたばかりであり、其の上今尚ほ雨天でもあるし、時間も定刻を過ぎて居りますから、出席すると云つた挨拶までに講題の輪郭だけを述べて置く事にしませう。

世界人類の起原は學者間に種々な説がありまして一定しませぬが、私はこれをヒマラヤ山脈の西北に當る高原が恐らくは人類の發原地ではないかと私かに信じて居るのであります。而して天地に初めて發生したる人類は、時を経るに従つて衣食住の生存競争を初めこゝに移住が初つたのである。或者は東に進み、或る團體は西に向ひ、或る者は南に北に思ひ／＼に移動し初めたのではあらうけれども、この移動の動機及び目的に就ては多少の神祕的の解釋がともなつてくる。各國の極く古代の歴史を少し繕いて見ると風俗習慣等は各各異つて居るけれども、自然崇拜、殊に太陽の崇拜は

自ら老者が必要である。こゝに「孝」といふ道德「忠」といふ道德が生れて來た。其れと同時に又「家庭」といふ特種のもが生じて來て「長幼の序」といふ様な道德も生じて來た。要するに東方の文明は「忠」「孝」文明である。精神的實行的要素に最も富んだ文明思潮を形成するに至つたのである。

南方文明の代表者は印度人である。印度人は其の移住した土地が非常に豊沃であつて多くの勞力を要せずして衣食住を得ることが出來たが爲めに、自然崇拜の思想が特別に發達して來た。而して冥想的、直覺的、哲學的特質を發揮するに至つて、其の形成したる文明思潮はいたく、東方文明が倫理的なるに反して崇教的、哲學的要素を多量に含で居る同じく精神的文明を形作るに至つたのである。

西方に向つて移住した人類は、東方南方の人類の形成したる文明の正反對なる文明思潮を生んだ。東方の農業なるに反して彼等は「牧畜」を業とした。従つて老者よりも若者若しくは壯者の必要と效力とを感し、幾

皆同じである、この點から考へてこの移動も太陽を目標として初めたのではないかと思はれる、これは現代各國の風習に就ても十分これを實證することが出来るのであります。例へば東方に日の本と云ふ國があり、朝日が鮮かな國があり、朝早く起きて太陽に向つて相手を打つ處、これに反して西方には夜會が多く晚餐、日没の凱旋門等夜に關したるもの即日没に關係したものが多し、即ち東方へ移住して來た民族は朝日の莊嚴を憧憬し、西方に移動して行つた人類は日没の神祕的な美はしさにあこがれ、南に北に思ひ／＼に太陽を目標として移動し時を経るに従つて定住するに至つて茲に各々特種の文明を形作るに至つた、即ち移住の動機と目的と地勢との關係によつて各々特種の文明を形成するに至つたのである。東方に於ける文明これを一口に云つてしまへば實行主義であつて精神的文明である。理屈を彼此云ふよりは理論などは何うでも好い感情に訴へてハツととやつてしまふと云ふ風な文明である。地勢は農業に適當し東洋は農業國となつた。農業には

組の夫婦が一家に生活するといふ東洋の家庭主義の孝道が發達したるに反し、個人本位の道德思想が特別に發達した、この個人主義の思想が中心となり其他の風俗や習慣が相寄つて、長い年月の間に、實行よりも理論に重きを置く文明が發生し、これが現代西洋の物質文明の源泉となるに至つた。

西方の理論的物質文明、南方の宗教的、哲學的、精神文明、東方の實行的倫理的精神文明、この世界文明の三潮流の間に處して日本は何ういふ地位に居るか。日本はこの東方の倫理的精神文明の結晶とも云つてよい皇室を中心としたる根底ある倫理的な思想を先天に具して居る。この思想は徳川時代に至るまで長い間、南方の宗教的哲學的思想即ち印度文明を開化して來、徳川時代に至つて十分に支那文明をも同化してしまつた。しかし未だ其の時までは、多少支那印度の物質的に發達してゐる文明に接して驚いたのであるけれども眞に理論的物質文明に接したのではない。維新の瓦解と共に西方の珍らしい思想は澎湃として流れ込んで來

て我日本の國を驚かした。けれども性來同化作用の強い日本の思想界はよくこれを近々四十年間に吸収し盡して今では殆んど其れに中毒せられて居る様な形になつてゐる。即ち古來から養ひ來つた日本の精神文明と新に吸収した物質文明との調和に苦んで居るのが今の日本の思想界ではなからうか。單なる個人の生活にいてもさうである。從來の信仰は、新たる風俗習慣と調和をしない、そこに不一致を來し、ペーソスを生じ日本現代の多くの人は現實と理想との調和に悩んで居る是れ吾人が日蓮主義を唱道するの所以ここにあるのである、日蓮主義は釋尊一代所説の教經の裡に於いて隨自意已證の法門即釋尊の大理想宇宙の大理想を述べられたものである。釋尊は其の初め華嚴に於いて理想のみを説かれ、次阿含其他に於いて現實のみを説かれた最後の八年法華經に至つてこの前に説かれたる理想と現實との調和をはかり、一代の諸經及三世十方微塵の教經を調和し結束し開顯し統一せられたのが即ち法華經である。是れを七百年以前に、大聖日蓮が釋尊のお

使として凡ての點から觀察して一大事因縁のある吾が靈國日本に弘め出されたのが日蓮主義である。日蓮主義はとりも直さず法華經主義であつて其の特長としては統一なること、現實的なること、國家的なること、積極的なること種々あるけれど、現實と理想とを調和し、宇宙の大理想を明かにし日本國民及日本國家の使命を自覺して、日本現代の思想界即世界に於る文明の三大思潮を如何に調和すべきかを一々論證して日蓮主義と現代の思潮的關係を述べる積りであつたのであるけれども、今宵はホンの輪廓のみを御話して挨拶に代へて置ませう。何れこの問題を以つて諸君に見ゆるの期近きにあらむことを想像します。

二十二日午後七時日本橋詰常盤俱樂部に開く雨を冒して集る求道の士女數十名居士の懇切なる教示は多大の聲益を布き雨の中に歡會を告ぐ

教 報

△天晴會夏期講習會は七月二十三日より一日日統一團に開く聴講員貳百餘名講演は本誌九月號に掲げむ
△地明會は七月二十日統一團樓上に開き關田布教師本多大僧正の信行上に關する講演ありたりき

△第一義會七月七日統一團に開く京藤學統中島徳藏君本多大僧正の人生と宗教に關する講演あり聴衆五百餘名にのぼる
△法華經人會七月十六日統一團に開き藤井教師井村植僧正本多講師の時代と宗教との接觸及歸一點に就て詳細なる批判あり

△大行天皇奉勸會八月五日午前八時統一團に於て修し奉る本多大僧正大導師として大衆一同を率ひ醍醐抄一乘の妙味を捧げ矢野大審院檢事は天晴會を代表して奉勸文を讀み奉る式後八代海軍中將姉崎文學博士本多大僧正の感話あり法要は嚴肅莊重を極め會員の敬虔なる態度さすがに當代知名の紳士的宗教會合なれば模範として誇賞するに足る

△八月三日統一團主催として大喪大法要を行ひ奉る本多大僧正の導師にて東京府下寺院全部參列し各會員參拜せり尙ほ本多大僧正は同日全國の僧員に對して、大喪中の心得を訓示せられたりと

△遠州見付町第一義會は漸次發展の氣運に進み文書に講演に全力を盡しつゝあるが常川醫師吉田山本右教師は熱心以て教線擴張に努め

つつありと云ふ
△神戸天晴會七月十三日神港俱樂部に例會を開き清水氏の感想談平井學俊氏河本氏の日蓮主義一斑に關する講演あり次で二十日姉崎博士を聘し大會を開く清水氏の開會ありて新開智啓氏の現代と信仰姉崎博士の明治の思想界

と日蓮主義に就て廣くの見を述べられ三百五十餘名の聴衆感にうたるとの多かりき
△京都二條妙滿寺右教部は客月來數十回に亘りて講演を開き盛んに日蓮主義の法鼓を鳴らし京都市民の覺醒を促がしつゝあるは爲道院すべき事也

本團發賣に係る法華經講演集及勤行作法
目下一部も無之依て當分の間は需めに應ずること叶難く候也

統 一 團

顯本法華宗要品附回向文

右上製並製共一切品切れに付追而製本廣告候迄御注文に應じ難く候

大正元年八月

東京淺草

慶 印 寺

統一

第貳百拾壹號

佐渡に於ける日蓮上人

文學士 小林一郎

日蓮主義綱要

大僧正 本多日生

統一團翼賛員勸募の辭

海外の發展

海軍大佐 佐藤鐵太郎

拆伏餘論。教報數件

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可(毎月一回)
大正元年八月十五日發行第一號二百十號(十五日)

(東京 三島印刷株式會社印刷)